

## ゲストのお話をきいて

## ～学生のコメントシートから～ 反響集



授業の最後にいつも、学生さん（“モグリの市民聴講生”も、おられます）からゲストのお話へのコメントを提出してもらっています。  
以下はゲストのお話が彷彿とするコメントの選りすぐりエッセンスです。（\*^\_^\*）

### 脳死のわが子の腎臓を提供した小児神経科医

関西医科大学助教授 杉本健郎さん (2001. 10. 19)

- ◆ 知らないことだらけでした。臓器移植でスポットを当てられるのは、いつも移植を受ける側。このメディアの策略にすっぽりハマられて、一方的な見方しかできていない自分に気づきました。（高野有佳）
- ◆ とても驚いたのは、「死んだら社会のもの」という考えのもとで臓器移植が考えられていることです。人の死というのは、点ではなく線であるというのをつくづく感じました。（浅原真実）
- ◆ 私の子供も呼吸器のお世話になった事もあり、以後、何回か生死をさまよう経験をしました。お産の後遺症で重度の脳性マヒです。今日のお話はドキドキしながら我が子を重ねて聞いておりました。私は、我が子の臓器を提供する気持ちにはなりません。頭で考えると必要だとわかります。でもその場面に直面しても臓器移植にはふみきれないと思います。（鈴木和恵）
- ◆ 脳死判定が、家族の同意もなく、心の準備のない状態で、診断の一部として行われるとは知りませんでした。とても失礼だと思い、悲しくなりました。（飯田裕子）

### “花井系” 大阪HIV訴訟団の4代目代表

花井十伍さん (2001. 11. 9)

- 感染していることがわかったとき、ガールフレンドをはじめ、まわりの人に話せた花井さんの力がすごいなあと感じます。また陽性とわかって間もない状況で、自分のことだけでなく周りの人へ目が向いていることも花井さんのあたたかい人柄だなあと思いました。（安田英美）
- 血友病がどんな病気なのか、どういう治療法だったのか、など知らないことだらけでした。シリアスな話をされているはずの花井さんととても明るく話していらして強

い方だなと懂れました。(池田奈穂)

- なんといっても肩の力をぬいた花井さんのスタンスに驚いた。原告団といっても家西系、川田系、花井系と「芸風」が違うとおっしゃられたのも印象的。(朝田千恵)
- 「安部さん達や厚生省のひどさ」と「余りにかわいそうな薬害の被害者」の構図、イメージが大きかったです。ひたすら、「厚生省が悪いねん！」との話になるかと思ったら、花井さんはさらりと「CD4が100に…」とか「医者が全員、全部悪いのではない、憎めない」とおっしゃっていたので、うそーっというかんじでした。まだ人数も少なく、差別はこれから、という言葉にもびっくりでした。(吉岡洋子)
- とっても素敵な方で、娘を無理にでも引っ張ってくればよかったと思いました。人間として非常に魅力的な、素晴らしい方に成長なさり、お母様がどんな思いでお育てになったのだらうと思いをめぐらせてしまいました。どうぞお体を大切に。(一井勝子)

**大和川・安田病院事件 取材の内幕を明かして下さった敏腕記者**  
**読売新聞大阪本社科学部次長 原昌平さん (2002. 1. 11)**

- ドラマよりもよっぽど生々しい。しかし、ドラマなどではない“事実”のむごさというものを見せ付けられた。本来、社会的に弱い立場にいる方々に救いの手を差し延べるべき人間が、その地位を利用する非道さ、そしてそれを許してしまう社会構造というものへの疑問は毎回ながら考えさせられる。(野田万容子)
- 事件の背景として、社会的に地位も高く名も通った人が、安田病院の擁護に動いていたというのに、問題の根深さを感じた。そうした様々な壁を越え、キャンペーン報道をした読売新聞のお話を伺って、医療問題に対して、メディアが強い威力を持ち、それを解明していく責任があると感じた。(西 寛人)
- まるで収容所のような実態が、「たまたま悪人がいて金もうけのために病院経営をしたために起こった」のではなく、行政や警察との癒着や福祉制度の未整備などが絡みあって生まれた構造的なものであったということがよくわかりました。社会問題を解決するために新聞社が展開するキャンペーンのお話も、原さんの仕事への誇りとやりがいを感じているさまがよく伝わってきました。(古賀暢英)
- 「安田的なもの」はまだなくなっていない、というお話が印象的だった。(石井さやか)
- 閉鎖された空間では、他から見れば一目でおかしいことが当たり前になってさらにその非常識が積み重なり感覚がにぶるため、外部との関わりが重要だと思った。不正が行われている所にはいつも権力との癒着があるように感じた。(河本香織)
- 本来は悪を暴く存在であるはずの警察もちょっとも頼りにならず、誰が悪を見つけるのだらうかという思いがする。そこへ新聞記者の役割が必要とされるのだらうが。(吉村恵)

## 「愛煙家」はタバコ会社の広告の被害者、と説く

大阪府立成人病センター調査部長 大島明さん (2002. 4. 24)

- ▶ 衝撃的だったのは、日本やアメリカが、たばこ産業のシェアを広げるために中国や途上国へ進出しようとしていると知ったことだった。喫煙は健康を害するものということが分かっているながら、資本主義の原理として進めているので、私は信じられなかった。矛盾点を感じた。検診というのはとても親切なサービスだと思っていたが実は違って、早期発見にも、まったく表面上なものがあると気づいた。(井原真由子)
- ▶ 日本のタバコや癌の考え方、予防対策の取り組み方が、国際状況から大きく立ち遅れていることを初めて知りました。道を歩いていけば必ず自販機をみかけ、最近では女性の喫煙家も増えたために分煙対策が叫ばれるようでは、何の解決にもならないんですね。外国では400~500円/箱には驚きました。(高野有佳)
- ▶ アメリカではたばこ対策が進んで、たばこ消費量も肺がんも減少しているということ、アメリカのたばこ会社が新しい市場を求めて日本に進出し、さらに、日本も中国に進出しようとしていることを初めて知った。自分の国だけよければいい、利益が上がりさえすればいいという考え方は弱者を殺すと思った。(井上恵子)
- ▶ 今日、一番印象深かったのは、受動喫煙をしたときのがんの発症率が高いことです。タバコを吸う僕としては、耳が痛いお話でした。(松山剛志)

## NHKディレクターとして障害福祉の番組を作り続けた

賢明女子学院短期大学教授 杉本章さん (2002. 5. 8)

- ▶ 「きらっと生きる」という障害者番組の主題歌を聞いてゾクッとしたことがあります。「もう少ししたらましな時代がくるような気がする」というフレーズがあり、それを障害者の方が手をつないで歌われていました。「ましな」という表現から、障害者の方がいかに苦勞して生きておられるのか、伝わってくると共に、何故か嫌悪感を感じました。理由はよくわかりませんが、私の中に偏見があるのだと思います。私は昨年まで5年間工学を専攻していました。コンピューターを主に扱っていたのですが、効率やコストパフォーマンスに気がいき、つついそれを使う人間の認識をおろそかにしてしまいがちです。そういうことに改めて気づいた90分でした。(藤原舞)
- ▶ 日本は障害をもつようになったとたんに暮らしにくくなると思うと怖くなった。自分とは関係のないこととと思っているから、そんなことを考えたこともなかったからだと思う。専門家の意見とかよりもやはり当事者の意見にも耳をかたむけるべきだ、というのは、どんな分野でも同じだと思った。当事者が自分の意見を積極的に言えるような環境をつくらなくてはいけないと思った。(白越崇之)
- ▶ 阪神大震災の時、全国の障害者のネットワークがいちはやく働いたという話が印象に残った。(井上恵子)

- 日本における自立生活運動が北欧やアメリカに比べて、これほど遅れているとは思わなかったです。現在でも、ノーマライゼーションはまだ建前だということで、これからは人々の意識改革も必要だと強く感じました。障害者の本人の声を直接聞き、伝えようとする杉本さんの情熱と、これまでの努力を様々なエピソードから知り、たいへん感動しました。(戸澤真澄)
- 「福祉」という語源について聞いた時、全人間の“しあわせ”ということを知り、驚いた。はっとした。私も確かに福祉というのは、特別な人へのサービスというニュアンスが正直にあったと思う。(井原真由子)

## ひと味違う大阪府の公務員

大阪府障害保健福祉室参事 野村龍太郎さん (2002. 6. 5)

- 点字や車椅子の対策を、障害福祉課がやるのではなく各部局がするという大阪流はあまり考えたことがなかったけれど、確かにそうあるべきだと思いました。「英語を話すのは特別なことでない」と、英語の専門職でなくても英語を勉強します。点字や手話なども、よく考えればそれと同じで、福祉の専門の人でなくても自分が仕事で人と関わるのなら点字や手話だってできるように勉強して当然ではないかと思えます。(山口まどか)
- 「障害者の方も府民だから、福祉部局に押しつけるのではなく各部局が責任をもちなければならない」というエピソードが心に残りました。野村さんが、“うるさい障害者”を自認する楠さんが推薦する行政マンであること、そして大阪がなんだか「すごい」「うまくいっている」ことの秘密が、すこし分かったような気がしました。多くの逆風にめげずに「ローギアードで進む」という表現がぴったりあてはまっているような気がしました。(山口宰)
- 計画の中で数値目標を定めて、それを実践していくことは、果たして本当に良いことなのか、数値をクリアすることだけが目標になって、趣旨が忘れられてしまうのではないかと疑問に思っていた。漠然と計画を作るだけではなく、具体的な数値目標を決めることの意義を見出せた気がしました。(横田恭子)
- 「大阪の障害福祉行政をここまで築いてきたのは、当事者である障害をもった人たちです」という言葉を心に刻んでおきたいと思えます。(高橋真央)
- 「言葉の十二単を着せられた障害者」という表現を聞き、衝撃を受けました。たしかに、世間は障害をもつ人たちのことを「かわいそう」だと思い、「心を傷つけないように」と思い、そのように配慮することが思いやりだと思い込んでいると感じます。しかし、それは、将来まで傷の痛みをひきのばすだけ、現実から目を背けさせるだけの最も残酷な行為だと気付きました。(森奥なおみ)

## ぶらり訪問やピアヘルパーで大阪から日本の精神医療を変えつつある

大阪精神医療人権センター事務局長 山本深雪さん (2002. 6. 26)

- ◆ 入院体験をふまえてのお話だったので、深く感じるが多かった。デリケートな状態に入ってきている人に対してそれを打ちこわすような対応がなされている、というお話は精神病院の現状を良く表しているのではないかと感じた。とてもおだやかな話し口調でとても聞き易かった。(中野有紀子)
- ◆ 病院とはいえないようなひどい病院であっても、病院の状態を改善させたり、訴えたりすることは簡単なことではなく、ひどい病院が放置され、存在を許されるという現状に驚いた。もっと関心を持ち、自分と無関係なものとして切り離さずに、自分につながるものとして考えていくことが必要だと感じた。(井上恵子)
- ◆ 今年のはじめ、実習で精神病院を訪問した。私たちに訪問を許可して下さる病院が少ない中、良心的な病院ではあるけれど、衝撃的なものだった。一番気になったのは“トイレ”のあり方だった。トイレの回数、便の状態を多くの人がいる中で言わなくてはいけない。箕面ヶ丘病院のトイレにはトイレトーパーがない。あるいは、何の囲いもない中で監視された中でトイレをしなくてはいけない。そう、山本さんもおっしゃっていた。そのようなトイレのあり方では、人間としての尊厳を失われてしまう。「恥ずかしい」「つらい」「寂しい」という気持ちを受け止めなければ、本当の治療にはならないと思う。精神病院のありかたについて、どのように改善するか。医者や看護婦の数を増やすのは当然のことながら、その一方で、人間が生きる病院の場として、“トイレ”から見直してみることも一つの方法かもしれない。(中村寿美子)
- ◆ 精神科の経営者の協会に、情報公開に関する山本さん思いを伝えることができたことに、まず驚き、山本さんの誠意と熱意に感動した。また同時に、“聞く”耳を持っている経営者がいることに、救われる思いがした。「おかしいな？」と感じたことの裏には重大な事実があることを実際に体験され、それを感じるだけで終わらせずに、変えるための活動をされているお話に、感動させられ、また勇気づけられた。(横田恭子)

## 実名を奪われ隔離されたハンセン病体験者

多磨全生園元自治会長 森元美代治さん (2002. 10. 16)

- まさか、患者自身に予防法廃止への反対派がいたとは…今日初めて知りました。「ハンセン病」については、裁判報道を通して知ったのですが、その中では、いつも一致団結というイメージでしたから。(佐々木春奈)
- 長期にわたってしいたげられてきた人々の苦しみ、社会の厳しさを改めて知った。同時に「らい予防法」廃止にあたって、「予防法が廃止されたら、私達は、私達の生活はどうなるんだ!」と叫んだ人々の話を聞いて、問題の根の深さを痛感した。(打谷真智子)
- らい予防法を守ろうとしたのが森元さんの先輩患者であった、という事実は、かなりびっくりしました。しかし、その背景に、経済的にも抑圧された当事者が、絶望という前提の上で、とりあえず生きるためのすべとしての経済闘争に専念せざるを得なかったこと、そして、それほど抑圧が当事者たちの内面にまで及んでいることに大変おどろき、様々な事を考えさせられました。患者運動をさまたげる圧力の強さ、世間の眼、法律としての差別…。それを変えるために“まずは自分が変わらな

ければ」という森元さんの決意の言葉の重さ…。本当に勉強になりました。(竹端寛)

- 全然知らなかった。見た事もなかった。本当に無関心だったと反省した。「ハンセン病」と最初に出会ったのが今日だった。物事を最初に進めていく事は、本当に困難なんだと思った。ある一瞬の思い切りみたいなパワーが必要なんだと思った。「社会を変える、それは、自分を変えるという事」という言葉が心に残った。(小南佳子)
- ハンセン病で一番辛いことは、一番近くにいてほしい家族が一番遠くにいることだとおっしゃったことが非常に印象的だった。その言葉は、この病気の社会的な現状を最も良く表現しているように感じた。そのような問題を引き起こす大きな原因は、患者を取りまく人を含め、人々、社会の病気に対する中途半端な知識であると思う。同じような矛盾、問題の難しさは、これまで、そしていまの日本の社会のあらゆる場面で見られるのではないかと感じる。(中野有紀子)
- 今、一番感じていることは、一人でも多くの人に、森元さんのお話を聞いて頂きたい、ということである。今日の約 90 分のお話の中で、私は三度、鳥肌が立った。一度目は、小学校からの病気の兆候とそこから病気を宣告された時の絶望のどん底へつきおとされた時のお話だ。私は、今までこのようなことを聞く機会がなかったが、ハンセン病の理解のためにも、また差別の理解のためにも知っていかなければならない。二度目は、本名で本を出版し、音信不通だった友人から連絡があったお話。そして三度目は、本名でテレビに出演し、それを見たご家族が大変憤慨されたお話である。両者は深く対立するようにも思う。しかし、どちらも本名で運動されているからこそその反応である。それがいまの日本の社会の状況なのだろう。多くのことを考えさせられた。だからこそ、私は一人でも多くの人に、森元さんのお話を聞いてもらいたいと思ったのだ。(中村寿美子)
- 苦しくつらい病気であるにもかかわらず、一番必要な家族からの心身的なバックアップが受けられないということが、本当に厳しい現実だと思えます。それがこのハンセン病の話題の中で、一番私が実感できたことです。(千石亜矢)
- 「社会復帰＝尊厳回復」という言葉に、とても重みを感じました。自分に最も近いはずの家族が、最も遠かった、というお言葉からもわかるように、ハンセン病患者は人間ではない、恥だ、という社会の偏見が、どれほど強いものだったのか、ということ、非常に強く感じました。「自分たち自身が変わらなければ」という森元さんの強さに感動しました。(森奥なおみ)
- 療養所で一生を終えようと考えていたところから、「社会が変わるのを待つのでなく、自分が変わらなくては」という考えに変わったところが、とても強く、尊敬できると思いました。一番理解してくれるはずの家族にまで非難されるなど、私が想像もつかないような困難を乗り越えたり、はねのけたりしながら、運動を続けてこられた森元さんのような方がいるから、今、私たちは「ハンセン病」と聞いても「感染するから怖い」とか、「家族に遺伝している」などとは全く思わず、「あの隔離政策は日本政府、日本社会の過ちだった。恥だった」と思うような社会になってきたのだと思えます。「差別や偏見の多い社会から差別や偏見をひとつでもなくしていく」という大仕事に、感謝したいと思いました。(山口まどか)

**「この薬は誰にも飲ませへん」と立ち上がり薬害を防いだ研究者**  
大鵬薬品工業生体防御研究所主任研究員 北野静雄さん(2002.11.6)

- 会社の、「労働組合が出来てもつぶす」、「不都合なことはどんな手を使ってでも隠そうとする体制」に驚きました。中立の研究機関でなければならない大学の研究科までが、データ改竄にかかわっていたことを知り、ショックを受けました。(斉藤翠)
- 労働組合というものの意義の大きさを感じた。これまでは、それは名ばかりのものだと思っていたが、企業の監視役としての責任を担っているのだ、ということがわかった。医者が安全だという薬や、大手の企業によって売られている薬は、なんとなく安心してしまう。労働組合のあり方や、内部告発をとりまく環境の改善等、企業内での体質改善を行うことは、最優先であると思うが、それが企業にとどまらず、行政や大学等にも広がっているということを考えると、それはたやすいことではなく、今後は消費者側の意識も変えていかねばならないのではないかと感じた。今回は製薬企業のお話であったが、最近よくニュースに見られる食品企業の偽装事件等と根本では似かよった点があるのではないかと思う。(中野有紀子)
- 「労働組合」という存在についての今までのイメージが大きく違ったものになりました。8人という少人数で、ここまでやってこられたことは、本当に多くの苦勞もあり、大変だったと思います。ここまで告発を実行できることは、本当にすごいことだと思います。製薬企業のもっている体質というのは、なかなかかえることができませんが、今日きいたお話を胸に、私もできることからやっていきたいと思えます。(井原真由子)
- 内部でこれだけ戦っている人がいたということ。戦い「抜く」ことの意味を教えてくださいました。それを潰そうと妙に必死になる会社の体制があったことは、まるで中学生のグループのいじめみたいですね。(タシロ・ユウキ)
- 労働組合の結成から始まり、告発や、労働組合の確率、そしてマイルーラの研究に至るまで、ものすごく力強いものを感じました。労働組合は企業を守るものというイメージがあったのですが、戦う組合という北野さんの言葉を聞いて、ネガティブな印象が払拭されました。(山本雅子)
- 製薬会社がデータを隠したりするのは、会社全体の意志だと考えていましたが、行政・会社の上層部によるところが大きく、中にいる研究者は板挟みになって発言力が弱いのだ、ということが、分かりました。(池上英隆)
- 今日のお話を聞いたことで、なにか行動を起こすことの大切さを感じ取ることができ、これから社会に出ていく身として、勇気をいただいた気がします。(中村寿美子)
- 私は、長いものにすぐまかれてしまうことが多くて、今日の講義を聞いて、自分の信念を持って動かなければ、とすごく反省させられました。悪いことは悪いと言えるように、動いていけたら、と本当に思いました。(西村育子)
- つらく、苦しい症状を和らげたいと思ってのんだ薬のために、新たな苦しみをうみだす薬害が、会社の自己中心さや厚労省のザル審査からおこっているということを知って、がくぜんとした。北野さんたちのような研究者の運動がないところで、恐ろしい薬が使用されているのでは、と思うと、薬をのむのもためらってしまいそうだ。「悪い薬は悪い」とものをしっかり言い続けてきた北野さんは、労組を維持していただきたいと思う。消費者も情報を表面だけでうのみにするのではなく、様々な世間の運動にも関心をもっていくべきと感じた。ただ、データをきっちり提出するように、といっても、そのデータがこりもせず捏造されることはないのですか？悪いものは悪いと主張することの難しさを感じるとともに、その中で石を貫きとおした北野さんはすごいと思えました。(秋山百合子)
- 北野さんが労組で活動し続けられたのは、真実は真実として受け止める研究者魂と、

北野さん自身の関西人的ユーモアがあったからだと思う。それは冗談ではなく、長く闘っていくには必要な資質だと感じた。(松田栄二郎)

## 「世直しは徹底的な情報収集から」と説く

医薬ビジランスセンター理事長 浜 六郎さん (2002. 11. 13)

- ◇ コレステロールは低い方がいいものだと思い込んでいたので、偽りの情報にだまされてはいけないことを痛感しました。製薬会社の意図も絡んで情報が流され、氾濫しているのだなと思った。(杭瀬智子)
- ◇ 不必要な薬が出回っているということには衝撃を受けました。また、新薬の開発以上に旧薬の見直しにお金を使っていくこともとても大切だと思います。私は今ドラッグストアでアルバイトをしていて、毎日のように薬を売る立場にいます。お客様をみていると、例えば、ある薬とある薬の良い面のみをみて、その相乗効果を期待して重ねて使おうとする方がたくさんいらっしゃいます。(山本雅子)
- ◇ 今日のお話を聞いて、今の薬を取り巻く状況に憤りを覚えています。一部の人が経済的に潤うためにどれほどの人が犠牲になっているか。世の中のシステム自体に疑問を感じる。私にできることはなんだろうか？(越石健司)

## 池田小学校事件後、ただちに精神病の人々を支えた

池田市長 倉田 薫さん (2003. 1. 22)

- ▶ 「市がバックアップしても、ありがとうと感謝しない障害者がいたらどう思うか」という質問に対する「ありがとうと言っていたくまでサービスします」という答えに感動しました。(竹端寛)
- ▶ 咲笑(さくら)開設に至る経緯を、障害者虐待疑惑、課長の自殺、池田小の事件を通して分かりやすく、興味深い形で聞かせてもらった。質問への答えが、「市長さんらしい答えだ」と感じられる自分の味をにじませる解答をされたことも印象的であった。(三澤咲美)
- ▶ 人生には3つの坂がある、上り坂、下り坂、そして「まさか」という話に、なるほどと感じました。同時に首長に求められる資質としては、そのような突然の事態に対する素早く適切な行動こそが挙げられるのではないかと思いました。(森奥なおみ)
- ▶ 私はあまり政治家が好きではない人間なので、今日はどんな嫌な人が来るのだろうと思っていましたが、非常に面白かったです。倉田市長は強い信念を持っておられる方だ、ということをととても感じました。私の住んでいる市の市役所の対応の悪さに腹が立つことが多く(しかもお給料は高い!)市の行政を避けるようになっていましたが、倉田市長のお話を聞き、それではだめだ、と改めて感じました。これからは自分の住んでいる市について、きちんと情報を収集し、今日のようにお話をする



機会があれば足を運び、おかしいと思うことがあれば意思表示をしていこうと思います。他市との比較も市民の役目だなあと感じました。(山本雅子)

## 娘さんの自死を経験したビジネスマンと父の自死を経験した阪大生 岡村昭さん・白神 美千恵さん (2003. 5. 7)

### <岡村 昭さん(経営コンサルタント)へ>

- ◆ 保母であった娘さんの過労のお話は、妹の看護婦の話と似ていた。女性中心の職業で、高い志と善意があり、目の前にはお世話しなければならない子供や患者がいる。そういう現実と直面しながら、自分を犠牲にして働かざるを得ない彼女たちの声を、しっかり受け止めて社会を変えていきたいと思った。(横田恭子)
- ◆ 福祉労働者の善意・愛情を搾取する構造について、以前から関心がありました。構造ゆえの問題で個人が追い込まれる社会というのは、不幸で、シンドイ社会であると改めて感じました。(竹端寛)
- ◆ 私には計り知れない悲しみから立ち上がり、ほんとうに力強く活動しているそのエネルギーに圧倒されました。ソーシャルサービスというカテゴリーの可能性の広さも発見しました。人間科学という学問を代表する講座だと再認識しました。(越石健司)
- ◆ 単に自分のためや娘のためではなく、今後の保育現場の労働条件のためにも、立ち上がった点がすばらしい。わたしの姉は、医療過誤で亡くなったが、訴訟を起こすことができなかった。岡村さんの行動が非常に参考になった。(清原昌弘)
- ◆ 遺族の無念さや行政への不信感から結束し、社会に訴え続けることで、社会を変えていくのだ、という決意が感じられた。また、判決後にすべてが終わるのではなく、そこから社会に働きかけることが重要である、ということが、とても印象に残った。(岡崎貴志)
- ◆ 身近に自死者がいる人が、300 万人という数字にびっくりしました。(佐藤緋佐子)
- ◆ 娘さんが亡くなられた夜の話は、衝撃的でした。退職されてからも悩んで苦しんでおられたかと思うと、好きで選んだ仕事なのに、その仕事のせいで、思いつめられたことを考えると、私は娘さんのことを直接知らないにもかかわらず、娘さんが亡くなられたことが残念でなりません。(島岡美映子)
- ◆ 保母を夢見て、独学で勉強し、一生懸命がんばってやっと手にした職なのに、その夢の職場に苦しめられた娘さんのことを思うと、胸が痛みます。娘さんは、過労により追いつめられ、死を選ぶしかなかったのに、自殺の場合、なかなか裁判で認められないなんて、くやしくてなりません。(田中千夏子)
- ◆ 明るくお話して下さっていたのですが、悲しみの感覚を味わいました。家族が自死することで体験する苦しみというのを直接伺うのは始めてで、衝撃的です。(中村有美)
- ◆ 私も福祉現場の一人として、とても身近に感じたお話でした。個人のレベルでいくら情熱があっても、頑張ろうとしても、職場の限界、労働条件の限界のギャップから「燃えつ

き」てしまう場合は、日常的にあります。真面目であればあるほど、追いつめられるし、死を考えるレベルに行く人、職場を退く決心をする人、その職場にとどまりながら揺れている人は、本当に紙一重であることは実感としてあります。(丸目満弓)

- ◆ 娘さんが亡くなられた時のことを話しておられる時の表情が、それまでとは全く違うもので、印象に残っています。深い悲しみや想いがかいま見えた気がしました。そういった状況から、社会システムに問題を投げかけ実際に行動に移されているのがすごいと思いました。(山本由佳子)

◆

#### ＜白神 美千恵さん（大阪大学人間科学部大学院生）へ＞

- ◆ お父さんが亡くなられてから「どうせ私もそのうち自殺するんだ」と淡々と思っていた、という言葉が、非常に印象に残りました。遺族のたどる心理的プロセスがとてもよく分かるお話でした。(山本由佳子)
- ◆ 私の親しい人の中にも、父親を自殺で亡くした人がいます。私を信頼して打ち明けるといって話をしてくれました。聞いたとき、何という言葉をかけていいのかわからなかったです。今でもそのことについては何も言えません。だけど、何も言えなくてもあつたくその人のそばにいたいと思います。(阪井万純)
- ◆ 「周りで家族に不幸があった人がいたら、普通に接してほしい」という言葉を聞いて、遺族の方々に対して、専門家でない私にも、できることがあるんだと思いました。(高橋友美)
- ◆ 配偶者を亡くした方が、その人に対し、まず、怒りを感じてしまうということを知っていて、はじめはびっくりしましたが、考えてみて、少し分かる気がします。配偶者を愛しているからこそ、私が支えたのによって怒ってしまうんでしょうね。(田中千夏子)
- ◆ 「そばにいてあげて欲しい」、「遺族の自責の念は消えることはない」、「罪悪感の質が変わる≡許される苦しみ」などが印象的な言葉でした。(浅野円香)
- ◆ 「自死遺族も何も変わらない、普通なんですよ」と言われたのがすごく心に残っています。やっぱりどうしても世間は「かわいそうに」という目で見えてしまうんだろうと思います。その目が遺族の方には本当につらく感じてしまう。障害者の方の話と少し似てるな、とおもいました。(木村恵理子)
- ◆ 「元気になったら遊びに行こうね」なんて言いません。元気じゃないとき、そばにいて遊びに行こうね、って言ってあげたいです。(田中千夏子)
- ◆ 「自死」という言葉が使われていたので、なぜかなと思いつつお聞きしていたが、質問タイムのときに、当事者、関係者の人たちにとって、「自殺」という言葉がとても重い、つらいものであるということを改めて知りました。(高野尚子)

### 医療事故をなくすために、医師に敬遠されることもいとわめ

医療事故調査会代表・八尾総合病院理事長 森 功さん (2003. 5. 28)

- 先生のお話を伺ったこの後、病院内で自分が変われるか・・・トライしてみるのが怖い気もしますが、一度患者としての権利を正面から主張してみたいと思っています。(高橋真央)

- 私は本屋でアルバイトしていますが、少し前に出版された『いい病院』という本が何回再入荷しても売切れてしまったことを今回思い出しました。このような本がベストセラ

ーになるのも、人々の医療に対する不安の表れだと思います。(鈴木真理子)

- 私は阪大吹田キャンパスの近くの居酒屋でバイトをしていて、そのお店には大学の医療関係者がしょっちゅう来るのですが、彼らの様子を見たり話をちらっと聞いたりすると「この人たちが日本の医療の、しかも第一線で働いて、人の命を扱っているのだ」って思うとぞっとすることがあります。(銚川真琴)
- 医療エラーがこんなに多く、近いところに存在することに驚いた。よくよく考えれば身の周りにも医療エラーにつながるようなことをしているお医者さんがあったように思う。田舎の実家の近くには、盲腸を取りたがるお医者さんがいて、私の兄は手の指が痛いと言ってそこに行ったのに盲腸だといわれていた。今では家族の笑い話だが一歩間違えると笑えない。(柳田寛子)
- 森さんのような内部から現状を暴き、私たちに示してくれるような人が必ず必要だし、いないと医者や病院を信じることは絶対にできなくなります。どうして同じ医者でもここまで違うのか・・・と悲しくなります。適切な処置と扱いは絶対に提供されるべきですね。(門中良江)
- 医者もミスをする生き物なのだ私たちが認識するところから新しい医療が始まるのではないかと思われました。(吉井晶子)
- 『矛盾点や落とし穴をズバズバと指摘された。「医療裁判でもうかるのは弁護士だ」「負担は保険者だ」と、なるほどと思う指摘が多くあった。今回リスクマネージャーという仕事を初めて知り、また、その苦勞についての話が多かったが、まず新しいシステムであり、大多数の医療者の中で少数のリスクマネージャーが本当に変えていけるのだろうかという点から、まだ不安が残ると思うので、リスクマネージャーがよりよく働けるシステムを作れば良いと思った。最後の「変えていきましょうよ」というのが素敵でした。(仲麻友子)
- 人間科学として医療の分野に何か貢献できるとしたら、それは人間性の科学、感性の科学なのだと思います。気になったことは医療裁判の長期化と原告勝訴率の低さです。ひとつの裁判の解決に3ヶ月とは驚きでした。医療事故にあってしまった患者本人、その家族の悲しみ、怒りは相当なものであるはずなのに、これでは更に増加するのではないかと、心身ともに疲れきってしまうのではないかと、思いました。(中村寿美子)

## コンサートに引っ張りだこ、CDも好評な

「ハルシオン」のボーカル・下村幸男さん (2003. 6. 4)

- 授業というより下村さんのコンサートを聞いているみたいで、すごく楽しかったです。「障害は個性の一つ」という言葉、ほんとうにその通りだと思いました。下村さんの歌は、私も含め悩みのある人間なら誰でも(悩みのない人はいないと思いますので)共感できる部分がたくさん含まれているように思いました。(木村恵理子)
- 演奏中の下村さんのオーラというか雰囲気、すごくのびのびしていてビリビリと

私の中に入ってきた。誇大妄想がどういう形で発生していくのかが、わかりやすく、しかも普通の感覚の延長ということも、私の浅はかな認識をくつがえしてくれて、新鮮でした。(越石健司)

- 精神病や障害を持つ方々と自然に接することができる、と思っていましたが、実はやはり偏見を持っているのだということに気づきました。下村さんが「薬の副作用」として語って下さった症状を私は精神病の症状だと思っていました。(島岡美映子)
- 精神的な病を患った人は、精神病院にずっと入院していたり、入院はしなくても、何歳になっても親元に残り、親に養ってもらい世間の目から守ってもらって生活している、というイメージをもっていました。それが全くの偏見だと気付きました。(鈴木真理子)
- 「格子の窓」「僕はきちがい」。歌詞の中にドキッとする言葉があって、そのドキッとする自分に驚いていました。「格子の窓」は歌の調子も重なって悲哀を感じました。あまり日常生活にはないものですよ。「格子の窓」の日常生活って。衝撃的でした。(中村有美)
- 「格子の中では、静かに命が朽ちる」という歌詞に、深く心を打たれました。まだたくさんの命が格子の中で幽閉状態にあるだけでなく、静かに朽ちるまで社会的入院を余儀なくされている現状が非常に哀しく腹立たしく、精神医療はまだ夜明け前だなあ、と改めて感じました。(竹端寛)

### **「住まいは福祉の原点」と説く 福祉医療建築の連携による住居改善研究会一福医建一代表 馬場昌子さん (2003. 6. 11)**

- ▶ 「日本の住まいには高齢者にとって非常に残酷である」という言葉は、非常に新鮮でした。そういう風に考えたことは全くなかったからです。(寺澤千尋)
- ▶ 高齢の方にとっては、住宅の中のあらゆる箇所に怪我をする危険性があるということに驚きました。交通事故での死亡者は子どもと高齢者が多いというイメージがありましたが、その交通事故よりも住宅内の事故による死亡が多いということも知って、住宅の安全性というものを改めて考え直してみるきっかけになりました。(鈴木真理子)
- ▶ 「住まいは福祉の原点」という考えは、日本にはない視点で新鮮に感じられるが、実際には、住宅改築には、金銭的な面からの抵抗だけではなく、改築そのものに対する抵抗が、特に高齢者には強いように感じられた。(岡崎貴志)
- ▶ 「住宅＝財産」という思い込みがわたしも強かった。この観念が根本的にあるため、住居改善もおこなわれにくい。長年の習慣を変える事はつらいかもしれないが、物があれば幸せだという物質主義的な幸福追求ではなく、性能重視の考え方にうつらなければいけないということに改めては、と気付いた。(岡田清春)
- ▶ 「寝たきりゼロへの10か条」は、福祉の原点である「住まい」が改善されなけれ

ば、あまり意味をなさない。家中どこでも危険がひそむのが日本の特徴であり、部屋数は多くても、実際「住みやすい」家になっていないものが多い。トイレの位置がすごく大切であること。寝室、トイレ、風呂は同じところにかたまっているべきであることなども知った。住宅改造＝住居改善とはいえないことを初めて実感した。(木村恵理子)

- ▶ 昇れない階段に手すりをつけて無理に昇らせたとしても、それはなんの解決にもなっていない、ということ。寝室を1階に持ってくるからこそ、ほんとうの解決策であるということ。発想の転換というか、ひっくり返されました。「どうやって助けてあげるのか」ではなく、「どうすればその人のパワーを活かせるか」が大事なのだとおもいました。(東元やよい)